特集

いま、倉橋と出会う 5

倉橋惣三（一八八二―一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問い直す機会にしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

驚く心

おや、こんなところに芽がふいている。
畠には、小さい豆の嫩葉（わか）が、えらい勢いで土の塊を持ち上げている。
藪には、固い地面をひび割らせて、ぐんぐんと筍（たけのこ）が突き出してくる。
伸びてゆく蔓（つる）の、なんという迅さだ。
竹になる勢いの、なんという、すさまじさだ。

おや、この子に、こんな力が。……
あっ、あの子に、そんな力が。……
驚く人であることに於て、教育者は詩人と同じだ。
驚く心が失せた時、詩も教育も、形だけが美しい殻になる。

倉橋惣三文庫3『育ての心（上）』フレーベル館　二〇〇八年　p. 32